革命エデュケーション　第一部

iPhoneの先にある未来

【第六回／最終回】

科学の客観性・倫理・想像力

【第六回／最終回】科学の客観性・倫理・想像力

3 ■「真実」の顔

10 ■みんな「いっしょで」、みんないい

16 ■この多様なる世界の中で

■「真実」の顔

鵜川　SNS社会における身振りは、確かにまだまだ成熟には程遠い感じがしますね。それを「倫理」として考えていこうとするのは、おおむねのところで共感できます。とはいえその「倫理」は、対象や状況、あるいは他者とどう向き合うかよりも、さらに前の在り方に大きく関わってくる気がします。というのも、現代のいわゆる情報消費社会は、流通する情報量が多い一方で、その中から自分にとって耳ざわりのいいものだけを選んで消費できる社会です。見たいものだけを見て、見たくないものは見ないでいられる。そこでは、デマやガセに簡単に乗る。自分にとって納得がいく意見に乗るのは気持ちがいいし、もしそれがデマだったと

しても、自分はだまされた被害者だから悪くない。特に今言った後半の方は、顕著ですよね。ネットに繋がってるんだから、検索掛けたりリンク元を確認したりして、その意見が正しいかどうか確かめられる場合も多いのに、それすらしない。だから、この場合の「倫理」は、自分の見ている世界をいかに否定するかという方法から入る必要があると感じます。

細井　ソースを確認するという「倫理」（笑）。まぁでも、そのあたりは確かに大切なことだと思います。僕自身もSNSでいろんなことを書くようになって、例えばある本の初出とか、いかに自分が間違った情報を正しいと思い込んでいたかとかがよくわかりました。自分はそれまで、わりと情報に関しては正確な方だと勝手に自負していたんですが、そのあた

りは謙虚に捉えて、出来るだけ裏を取るようにとかは意識するようになりましたね。

鵜川　で、もっと厄介なのは、事実が複数ある場合。例えば、ある状況を問題視する根拠として科学的なデータが提示される。逆に、その状況を無視できる根拠として科学的なデータが提示される。共に、素人目にはどちらが正しいのか分からない。というか、どちらも正しいように見える。で、どちらを信じるかというと、信じたい方なんですよね。こうなってくると、ある領域の事柄については、専門的な知識を持たない素人が口を挟むべきじゃないんじゃないか、っていう気がします。

　とはいえ、その素人（って僕も多くの領域に関してはそうですが）が感覚的に

どう感じるかっていうのは、意外と無視できないかな、とも思います。「なんとなくいやだ」とか「感情的には許せない」とか（それを総体として可視化したものが「一般意思 2.0」でしたね）。ただ、それを科学的なデータや客観的な判断と一緒くたにされると、それは違うだろうと思ってしまう。とはいえ、その反応も自分のオリジナルのものというより、自分が接しているメディアや所属しているクラスタで流通している言説のコピペに過ぎないっていう問題に返ってきちゃうわけですが。

細井　事実が複数あるというのは、まさに原発をめぐる状況そのものですよね。昨年、放射能汚染についてどこまでが安心なのか？　という議論が起きたとき、反対派も推進派もそれ以外も、みんなあ

る意味では信じたい数値を信じた、という状況がありました。これってすごく示唆的だと僕は思っていて。

　僕が大学の頃に、自分の師匠みたいな人が「科学もまた一つの世界の切り取り方の方法、つまりは一種の主観に過ぎない」って言っていて、その頃の僕は確かにそうだよな、とは思ってその話をしたりしてたんですが、正直あまり周りの人には理解されなかった。けど、今は科学的な「客観的データ」そのものがそもそも客観的でないことが明るみに出てしまっている（その意味では鵜川さんの専門家に任せろ発言には若干違和を感じます）。要するに、「私は私、あなたはあなた」という島宇宙的状況の絶対化て流れがより加速するのかな？　ていう気がして、そこへの不安を感じるんですよね。

鵜川　まあ、科学を絶対視できないっていうのは確かなんですけど、いくつかの領域に関しては、どうしても科学的な分析を無視することはできないんじゃないかな、とも思うんです（実は、原発に関しては必ずしもそうではないと思っているのですが、今は科学の取り扱いの話になっているので、ひとまずおいときます）。その上で、これまずいだろ、と僕が思うのは、その専門家たちが語りかけている相手が素人だということ。専門家同士で打々発止やり合ってくれるならいいんですが、どうもそういう場が足りてない気がします。

細井　そうですね。そのあたりは、理系の人たちと文系の人たちの違い（これもけっこう興味深い話題です）という部分もあったりするんでしょうけど。専門家

同士の話ってのは、もっとあっていいと思いますね。それを見る人々も鍛えられるし、専門家自身も話すことにもっと自覚的になる。一部の理系の人たちは、さっき書いたような科学的な客観的事実イコール真実だ、という風に捉えている人もいるように思います。もちろんデータの取り方とかによってそのあたりは変化してしまうので、自覚的な理系の研究者はそうじゃないわけですけれど。一方で文系の人たちは「そもそも真実というのは一つじゃないかもしれないし、プレゼンの仕方によって物事の見え方は変わる」という意識が強いように思います。なぜそれを思ったかというと、原発事故のときの保安院の人の態度に「自分は真実を言っているのに、どうして人々はその真実を受け入れてくれないんだろう？

ねえ、私は正しいんですよ」みたいな困惑したものと甘えを僕は感じたんですね。で、同時に思ったのは「ああ、真実は真実らしい顔をしていることが大事なんだな」ってことなんですけど。

■ みんな「いっしょで」、みんないい

鵜川　結局のところ、自分の領域に異質なものを取り込み続けることに、人は耐えられないんだと思います。クラスタや島宇宙の話の繰り返しになっちゃいますが、SNS も自分の信じる世界を見るためだけに使おうと思えば、簡単にそれができてしまう。Twitter は、見たくない情報は読み飛ばせるし、フォローしても解除することができる。コミュニケーションを拒絶するためにブロックすることもできる。自分の TL に、自分にとって耳

ざわりのいい情報しか流れない状態にすることは、結構たやすい。

その延長でもうひとつ、最近ネットで見て興味深いなと思ったのが、日本における Facebook 利用者の内訳。結構簡単に調べられるようなのですが、35 歳以上が過半数、東京在住の人は七割という結果に[1]。そのブログの記事を書いている人も、単純にこの数字を鵜呑みにはできないとしながらも、おおむねの所で傾向は摑んでいるのではないかとしています。

結局、SNS がもたらしたのは、クラスタが細分化されて林立している状況じゃなくて、クラスタが重層化してる状況な

1　永江一石「More Access,More Fun!」“ 祝 1000 万人突破記念。日本の Facebook について調べてみてびっくりしたこと ”，http://www.landerblue.co.jp/blog/?p=3602，参照 2012-10-01

のかな、と。自分のいる場所からちょっと外に目をやっても、外の世界なんか全く見えない。自分のいる場所は、別のちょっと大きなクラスタに囲い込まれてるんじゃないかという気がします。

細井　FBの話は面白いですね。「FBはリア充向け、Twitterはオタク向け」的な言説が一時期流行したことがあって(笑)。それぞれの持つ特質をそれこそ「上手いこと言った」からなんだと思いますが、この分析はまさに「客観的」にFB利用者の社会的属性や階級を示している、興味深い指摘だと思います。

　そもそもFB自体、アイヴィー・リーグ[2]の学生たちの交流の場として作られたというような成り立ちで、最初からあ

2　アメリカ合衆国の東海岸に位置する、ハーバード大をはじめとした名門私立八大学の連盟。在学生・卒業生は政財界から学会まで幅広い人脈を形成している。

る一定の階層を中心とした人々がユーザーとして想定されていたわけですよね。そう考えると、あるSNSやその内部での交流というのは、それこそ疑ってかかるべきという気にもなってきます。僕は6月にあるミュージシャンのライヴに行ったんですが、TLはその話題でいっぱい。フォロワーの人が「日本中の人が○○（ミュージシャン名）のライヴに行ってるような気がしてくる」と書いていたんですが、実際に会場にいたのは500名程度の人間なわけなんですよね。あるいは趣味とかを共有していない知り合いの人と話していて、「△△って知ってる？」「いや知らないけど」「自分の周りでは、みんなその話してるよ。Twitterとかでもよく出てくるし」みたいな感じだったり。

鵜川　だとすれば、なおさら「自分の見ている世界をいかに否定するかという方法」が重要になってくると思うのですが、これって結局、どこまで行っても自分にとって都合のいい世界は存在しないということを受け入れなくてはならない、という何とも「教育的」な結論にしかたどり着かないんですよね。

　近代化によって交通が発達し、人間関係が複雑化した結果、それまで同じ共同体の成員だからという理由だけで発生していた関係性を否定することが可能になった。それが、現代に至って情報技術の発達によって更に人間関係が変容したことで、既に発生した関係性を消去することが可能になった。結局のところ、人間は前近代から変わらず、異質な他者を排除し、同質的な場を作り上げることに腐

心してきたように感じられます

細井　そうですね。テクノロジー自体はいかに人間が快適に過ごせるか？　ってことを、昔から追求し続けてきたように思います（それこそ水洗トイレの発明とか……：笑）。その「快適さ」っていうのが、人間関係においては摩擦がないことだったり、自分の嫌いな人と出来るだけ関係を持たないことだったりする。ただその世界っていうのは、以前から話が出ているように同質な他者、あるいは自分の反映としての他者でしかないんですよね。だから、受け手の側も作り手の側もネットにおける「人間性」とか「人間関係」とは何なのか？　どうあるべきなのか？　みたいなことをもっと考える必要があると思うんですよね。目先の単なる便宜性に捉われないで。

■ この多様なる世界の中で

細井　僕も鵜川さんとの対談を通じて、ネットに留まらず世の中のすごく多くの物事が「これは何のためのものなのか？」っていう問いが浅いまま存在しているなぁ、と思ったんですよね。たとえば服なんかは「とりあえず暑さ寒さをしのぐ」とか「たとえばビジネスにおける必要なシチュエーションに対応する」っていうのが第一目的としてあるんだけど、じゃあその先の、服っていうモードが社会において何を作り出すのか？　みたいなところまで考えられてるものって少ないなと思ったんですね。もちろん、食べ物とか飲み物にしてもそうなんですが。

　その意味でSNS（およびそれを中心としたネットにおけるコンテンツ）の作ら

れ方は、他の分野に比べてそういう自覚が欠けている度合いが高い（特に作り手に）という気がする。それらの多くは言語による表現手段だから、当然人の在り方とか関係性といったことに関わってくるはずのものなのに、深い検証とか哲学がないままリリースされてるものが多いな、と思います（同時にそれがネットの面白さでもあるという意見は否定はしませんが）。

鵜川　それに近い話で、最近僕の中で関心があるのが、教科書の電子化[3]です。

3　初代 iPad の発売された 2010 年頃から度々話題に上がっているが、2012 年現在、デジタル教科書教材協議会（DiTT）は、「2015 年度中の『超高速無線 LAN の整備率 100％、全小中学生への端末配布、全教科のデジタル教科書教材の用意』達成を目指し、実証実験や政策提言を行っている。」（西畑 浩憲＝日経ニューメディア「デジタル教科書教材協議会が平野文科相に提言、教育情報化に橋下大阪市長も前向き」，2012-07-11，http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/NEWS/20120711/408621/，参照

というか、ICT 端末を教育現場でどう活用するか、ってことについて読んだり考えたりしてるんですが、このことについて言及されているもののほとんどが、コンテンツの有用性（映像資料の充実など）と学習の個人化（学習状況の個人差の可視化や教員に質問する環境の整備など）の話に終始していて、授業内容（教授法やカリキュラムではなく文字通り「内容」です）の変容に言及しているものが、ほとんどないんですよね。これまでの授業は、生徒が知らない情報を教員が教えて、覚えているかを確認するとい

2012-10-01）

また、具体的な提言は DiTT の HP で公開されている。（DiTT「政策提言 2012」，http://ditt.jp/about/policy.html，参照 2012-10-01）

4 Information and Communication Technology、つまり情報通信技術のこと。以前 IT と呼ばれた領域は、ネットワーク通信技術の革新によって、ICT と呼称されるのが一般的になっている。

うのが基本形態です。でも、いわゆる情報そのものは、常にネットにアクセスできる状況になると、わざわざ頭に詰め込む必要が無くなってしまいますよね。だとすれば、どうやって必要な情報を引き出し、その真偽を確かめ、思考の材料とするのかという点が授業「内容」としては重要になるはずなんですよね。（もちろん、情報を思考の材料にするには、その前提としてある程度の知識が必要ですし、知識を増やすには情報を記憶する必要がありますが。）

　結局、ネットワークとそこに常時繋がることができる環境の実現が、一体何を生み出すのかということを考える必要がある。批判しろとか悲観的になれということではなく、あらゆる情報（個人の情報や友人の書き込みも含めて）がコンテ

ンツとしてアクセス可能になるという状況を過小評価するな、ということです。情報リテラシーと倫理が結び付いた先を構想すべきだと思います。

細井　今の話を聞いていて、DiTT が考えてる能力[5]というのが「情報を分かりやすく検索、提示する技術」でしかないのが丸わかりでしたね（笑）。

5　「デジタル教科書法案　概要」“第二 目的及び定義”には以下のようにある。

一　目的

　教科用図書としてのデジタル教科書の普及の促進を図り、もって二十一世紀にふさわしい教育の実現に資することを目的とする。

二　定義

　この法律で「デジタル教科書」とは、児童及び生徒の学習の用に供するため文字、図形、音声又は映像を組み合わせたものに係る情報を電子計算機を介して提供するためのプログラム（電子計算機に対する指令であって、一の結果を得ることができるように組み合わせたものをいう。）をいうものとする。

（「デジタル教科書法案　概要」，http://121.119.176.71/office/DiTThouan_gaiyo_ver2.pdf）

確かに、記憶が外部装置に任せられることになれば、必要な情報に適切にアクセスしてそれを手に入れること以上に、それをどう位置付けるのか、どう活用するのかが重要になります。ただ、それには哲学が必要ですよね。ちょうど、材料から料理を作るシェフや板前のように。

この対談の最初にスティーヴ・ジョブズの話をしましたけど、彼はけっこう極端な形とはいえコンピュータ端末の先にいる理想の人間像というのを明確に描いていたと思います。そういう発想はやっぱり必要なんだと思うし、そこに共感する人間がたくさんいたからアップル製品の魅力も存在した。前回書いたように、僕はネット社会におけるスキル＝倫理と考えているので、そのあたりは大人がちゃんと考えてあげないといけないと思い

ます。

鵜川　そうですね。そういった倫理は、どうしても自然には生まれてこない。それこそ、時間的にも空間的にも、異質な他者を駆動し続けることが、あるいは大人がそういう存在として関係を強要し続けることが必要なのかもしれませんね。

　あとは、ここにいない（もしかしたらどこにもいない）レベルで他者を想像することも必要だと思います。自分と、自分に見える環境が、一つの状況に過ぎないことを知り、そこに自閉することがいかに危険なことかを実感できるような仕組みを生み出すことも必要でしょう。

　そして、全ての大人がその視点に立てるわけではない以上、教育機関の社会的有用性・重要性は、単に子どもに対する教育という枠を超えて拡大していく気が

します。例えば、iTunes U[6]やTED[7]を通じて、大人が知り、考えることができる環境が広がっていることを見ていると、そういったことが実感されます。

　そして、この文章が、ブログや個人のホームページに書かれているのではなく、世田谷学園という教育機関の公式HPに上がっているということが重要で

6　2007年にApple社が開始した教育サービス。iPodやiPadに、講義・ビデオ・テキストといった無料の教育コンテンツをダウンロードして学習することができる。コンテンツは、スタンフォード大学、イェール大学、オックスフォード大学といった世界屈指の大学から、ニューヨーク近代美術館、ニューヨーク公立図書館などの公共施設に加え、東京大学、京都大学、慶応大学、早稲田大学などの日本の大学も提供している。

7　Technology Entertainment Designの略。アメリカのカリフォルニアを拠点にしているグループで、文字通り「テクノロジー、エンターテインメント、デザイン」を中心とした様々な分野の講演会の場（TEDカンファレンス）を用意し、この映像をインターネット経由で世界中に配信している。

　NHK Eテレでは「スーパープレゼンテーション」という番組で、TEDのプレゼンテーションを放送している。

す。メディアそれ自体が決して透明ではないということを意識せずにはいられない。（当然、その分僕たちの身も引き締まるわけですが。）

細井　想像力の話は僕もしようと思っていました。やはり想像力というのは一つのキーだと思います。鵜川さんが書かれているような異質な他者を想像するという意味や、人やシステムがどこへ向かうべきか、何を実現すべきか、というのを考えるといった意味において、それはすごく必要とされるものだと思いますし、それは情報の効率的な取得方法を学ぶ、とかとは最も遠いところにある能力だと思います。

　そしてメディアの話とも繋がるんですが、僕たちは生きている以上、何らかの形で発話したり行動したりせざるを得な

い、つまりは何かを発信しているわけで、絶対に透明な存在ではありえないんですよね。でもそこを引き受けていかなくてはいけない、けっこう大変だけど。

　あとは逆にみんなが、テクノロジーによって既成のものを変えることが出来るっていう発想を持つべきだと思いますよね。かつてのテクノロジーには近代という進化論的な時代状況もあって、そういう期待があったわけだけれども、現代ではそういう発想は薄れてしまっている。

　で、そのためにはやっぱり倫理というか、もっとカジュアルに言えば物事に対する見識が必要になる。それを僕たちは作り出し、そして語っていくべきなんだと思います。

鵜川　そうですね。それがこの企画の主目的でもありますし。

さて、この辺で「革命エデュケーション 第一部 iPhone の先にある未来」を幕にしたいと思います。第二部では、第一部で話したこと――特にメディアにまつわる諸問題――を引き継ぎつつ、我々の身体とコミュニティの関係について話したいと思います。それでは、しばしのお別れです。読者の皆様も、ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

（第一部 完）

《革命エデュケーション》

iPhone の先にある未来

【第六回／最終回】

　科学の客観性・倫理・想像力

平成 24 年 10 月 10 日　発行

著　者　細井 正之・鵜川 龍史

編集者　鵜川 龍史・細井 正之

発行所　世田谷学園 国語科